



AP クラッシュ ファイルのアップロード

- [AP クラッシュ ファイルのアップロード \(1 ページ\)](#)
- [AP クラッシュ ファイルのアップロードの設定 \(CLI\) \(3 ページ\)](#)

AP クラッシュ ファイルのアップロード

変換したアクセス ポイントが予期せずリブートした場合、アクセス ポイントではクラッシュ発生時にローカルフラッシュメモリ上にクラッシュファイルが保存されます。装置のリブート後、リブートの理由がアクセスポイントからデバイスに送信されます。クラッシュにより装置がリブートした場合、デバイスは既存の CAPWAP メッセージを使用してクラッシュファイルを取得し、デバイスのフラッシュメモリに保存します。クラッシュ情報のコピーは、デバイスがアクセスポイントから取得した時点でアクセスポイントのフラッシュメモリから削除されます。

- デバイス障害の場合：システムレポートは障害が発生したメンバーで生成されます。スタック内の他のメンバーではレポートは生成されません。
- スイッチオーバーの場合：システムレポートはハイアベイラビリティ (HA) のメンバースイッチでのみ生成されます。非 HA メンバーについてはレポートは生成されません。



(注) リロード時はレポートは生成されません。

プロセスのクラッシュ時には、次の情報がデバイスからローカルに収集されます。

- 完全なプロセスコア
- トレースログ
- Cisco IOS の syslog (非アクティブなクラッシュの場合には保証されません)
- システムプロセス情報
- ブートアップログ
- リロードログ

- 特定のタイプの /proc 情報

これらの情報はすべて、個別のファイルに格納された後、アーカイブされて1つのバンドルに圧縮されます。これにより、クラッシュのスナップショットを1つの場所で取得して、分析のためにボックス外に移動できるようになります。このレポートは、スイッチがROMMON/ブートローダにダウンする前に生成されます。



(注) 完全なコアおよびトレースログ以外はテキストファイルです。

crashinfo ファイル

デフォルトでは、システムレポートファイルが生成されて /crashinfo ディレクトリに保存されます。容量不足のために crashinfo ファイルのパーティションに保存できない場合は、/flash ディレクトリに保存されます。

ファイルを表示するには、**dir crashinfo:** コマンドを入力します。次に、crashinfo ディレクトリの出力例を示します。

```
Switch#dir crashinfo:
Directory of crashinfo:/
46553 drwx 1024 Jun 29 2015 14:52:09 +00:00 ap_crash
12 -rw- 0 Jan 1 1970 00:00:11 +00:00 koops.dat
11 -rw- 0 Mar 22 2013 07:50:30 +00:00 deleted_crash_files
13 -rwx 594269 Mar 22 2013 07:50:30 +00:00 crashinfo_platform_mgr_20130322-075017-UTC
14 -rw- 44 Sep 9 2015 09:28:47 +00:00 last_crashinfo
15 -rw- 355 Sep 9 2015 09:29:31 +00:00 last_systemreport_log
16 -rw- 105753 Mar 22 2013 07:50:47 +00:00 system-report_1_20130322-075017-UTC.gz
17 -rw- 39 Sep 9 2015 09:29:31 +00:00 last_systemreport
18 -rwx 585996 Mar 22 2013 08:01:58 +00:00 crashinfo_platform_mgr_20130322-080144-UTC
19 -rw- 105065 Mar 22 2013 08:02:15 +00:00 system-report_1_20130322-080144-UTC.gz
20 -rwx 3426209 Sep 9 2015 06:49:12 +00:00 crashinfo_iosd_20150909-064754-UTC
21 -rwx 9540376 Sep 9 2015 06:49:13 +00:00 fullcore_iosd_20150909-064754-UTC
22 -rw- 469476 Sep 9 2015 06:49:56 +00:00 system-report_1_20150909-064754-UTC.gz
23 -rwx 3425350 Sep 9 2015 09:28:47 +00:00 crashinfo_iosd_20150909-092728-UTC
24 -rwx 9535535 Sep 9 2015 09:28:47 +00:00 fullcore_iosd_20150909-092728-UTC
25 -rw- 459709 Sep 9 2015 09:29:28 +00:00 system-report_1_20150909-092728-UTC.gz
26 -rw- 0 Sep 22 2015 11:11:33 +00:00 tracelogs.J8C

50601 drwx 10240 Oct 28 2015 22:42:50 +00:00 tracelogs

248354816 bytes total (204800000 bytes free)
```

システムレポートは、次の形式で crashinfo ディレクトリにあります。

```
system-report_[switch number]_[date]-[timestamp]-UTC.gz
```

スイッチがクラッシュしたら、システムレポートファイルを確認します。最後に生成されたシステムレポートファイルは crashinfo ディレクトリの下に last_systemreport というファイル名で保存されます。システムレポートおよび crashinfo ファイルは、Technical Assistance Center が問題のトラブルシューティングを行う際に役立ちます。



- (注) トレースログやその他の目的に使用できる領域を確保するため、システムレポートやトレースアーカイブはコピー後に flash ディレクトリや crashinfo ディレクトリから消去することが重要です。

APクラッシュファイルのアップロードの設定 (CLI)

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	enable 例： Device# enable	特権 EXEC モードを開始します。
ステップ 2	ap name ap-name crash-file get-crash-data	AP クラッシュ情報を収集します。クラッシュファイルは、AP がレディ状態までリロードした後に自動的にアップロードされます。したがって、このコマンドは手動で実行する必要はありません。
ステップ 3	ap name ap-name crash-file get-radio-core-dump slot {0 1}	スロット 0 またはスロット 1 の AP コアダンプ ファイルを収集します。
ステップ 4	ap name ap-name core-dump tftp-ip crash-file uncompress	指定した TFTP の場所に AP クラッシュコアダンプ ファイルをアップロードします。
ステップ 5	show ap crash-file 例： Device(config)# show ap crash-file Local Core Files: lrاد_AP1130.rdump0 (156) The number in parentheses indicates the size of the file. The size should be greater than zero if a core dump file is available.	クラッシュファイルがデバイスにダウンロードされているかどうかを確認します。

